

ローマ字—漢字のアルファベット

福島 邦道

本誌第百三十八集には、大塚光信氏による小著『続キリシタン資料と国語研究』についての詳細な書評が載せられている。著者としてその労を多とするものであるが、資料解釈には従い難いものが多い。しかし、本誌での蝸角の論はさげ、他日ほかのところで卑見をのべたいと思っている。

キリシタン資料には、まだ未解決のものがあり、ここにとりあげられるのもその一つの例である。

最近、ヴェネチヤ大学のボスカロ氏より紀要の抜刷を送られてきた。

A. Boscaro, *I gesuite e gli inizi della stampa cristiana in Asia Orientale*, 1984.

△東アジアにおけるイエズス会とキリシタンの出版の始まり▽
 ちなみに、女史には日本の天正使節関係の印刷物についての労作
 (ライデン 一九七三) がある。
 論文の中に、ヴェネチヤの聖マルコ図書館蔵のテヴノーの次の書
 から撮ったアルファベットの影印が二葉ある。

A	a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m
亞	拔	則	得	枝	非	墨	何	移	木			
n	o	p	q	r	s	t	u	x	y	z		
呢	阿	古	カ	四	師	德	烏	是	水	女		
a	c	i	o	u				ba	bc	bi	bo	bu
亞	枝	移	阿	烏				視	物	尼	莫	無
cc	ci	co	cu					da	dc	di	do	du
華	則	止	可	古				火	得	地	多	都
fa	fc	fi	fo	fu				ga	gc	gi	go	gu
母	伴	非	福	父				我	飲	臥	買	
ia	ic	ii	io	iu				ha	hc	hi	ho	hu
牙	野	支	王	点				礦	歷	禮	祿	路
ma	mc	mi	mo	mu				na	nc	ni	no	nu
馬	麻	米	磨	模				納	諾	尼	諾	奴
pa	pc	pi	po	pu				ra	rc	ri	ro	ru
巴	邊	皮	泊	布				臘	文	裏	寔	燭
sa	sc	si	so	su				ha	hc	hi	ho	hu
沙	色	四	氣	所				恭	德	茶	祭	視
ua	uc	ui	uo	uu				za	zc	zi	zo	zu
鞞	勿	未	勿	務				詐	宰	制	作	祖

M. Thévenot, *Relation de divers voyages curieux*, Paris, 1663-1672

△珍しい数々の旅行報告▽

このアルファベットは、すでにラウレス師の『キリシタン文庫』(一九五七)にとりあげられ、次のような称呼で、イエズス会出版物の第一番に序でられている。

A Latin-Chinese Alphabet (Macao, 1585)

『キリシタン文庫』を読んでいた頃から注意してはいたが、ボスカロ氏の論文に接し、重要な資料であることがわかってきたのであ

ヴァリニャーノは、第一回の訪目を終えたあと、一五八六年イエズス会の総長宛の書簡に次のように記した。

日本で用いるべきローマ文字を中国で印刷できるかどうかについて、一五八五年マカオで木版で印刷した「AbecedarioハアルファベットVをインドのゴアから総長に送付したのである。

この原物は現存しないが、さいわい、テヴノーの『旅行報告』に転載されているのである。

ラウレス師は、その年代から考えてこれを第一番にし、「ローマ字」漢字のアルファベット」と名づけられたのである。

影印の上部二行は、

a 亞 b 襖 c 則 d 得

などとなっている、a b c に漢字をあてたものであることがわかる。

しかし、その下の八行は a b c 順になつてはいるが、その構成は大分ちがったものである。

たとえば、左側についてみると、

u	鳥	cu	古	fu	父
o	阿	co	可	fo	福
i	移	ci	止	fi	非
e	掖	ce	則	fe	佛
a	亞	ca	革	fa	法

などとなっている、 \overline{abc} の形のものに漢字をあてているのであり、しかもそれが五つずつで組み立てられている。

そこで、漢字を除いて、ローマ字だけを表示すると次のようになる。

a	e	i	o	u	ba	be	bi	bo	bu
ca	ce	ci	co	cu	da	de	di	do	du
fa	fe	fi	fo	fu	ga	ge	gi	go	gu
ia	ie	ii	io	iu	la	le	li	lo	lu
ma	me	mi	mo	mu	na	ne	ni	no	nu
pa	pe	pi	po	pu	ra	re	ri	ro	ru
sa	se	si	so	su	ta	te	ti	to	tu
ua	ue	ui	uo	uu	za	ze	zi	zo	zu

この表の特徴は、 \overline{abc} のものが五段ずつで構成されていることである。 \overline{abc} といえは、日本語の拍を示すわけであり、日本語の五十音図を模して作ったものではないかと考えられてくる。

ヴァリニャーノは、日本での布教のためのものを中国（ポルトガル領マカオ）で作ったのであり、中国音で示してあるのは日本語の拍による発音と推定されてくるのである。もとより、中国にはこんな音節表はないのである。

この「アルファベット」は、五十音図を a b c 順にならべ変えたものである。

キシタンでは、日本の「いろは」順をアルファベット順に組みかえることがある。後のものであるが、ロドリゲスは、日本の名乗字をアルファベット順にし、「落葉集」本篇もアルファベット順注1にしている。さかのぼって、この五十音図も、そうしたのであり、そのために行数も、濁音・半濁音をあらわす

b d g p z

とふえ、ラ行音は、rのほかlもあり、全部で十八行の構成になっている。しかし、日本の五十音図がなければこういうものは作れなかったであろう。

行に対して、段は、

ア エ イ オ ウ

の順になっている。

五十音図における行と段、すなわち経緯を精細な図表にしたものに、竹田鉄仙氏の「五十音図経緯表」があるが、こういう順序のものはない。時代はおくれるが、ケムベルの五十音図はこういう順になっている。それについて、山田孝雄氏は、

母音の順序は「アエイヲウ」となつてゐるから、ケムベルが西洋の所謂アルファベットの順序により意を以て改めて配列したものであらうと思はるるが、その順序が平安期末期の教長の古今集注や顕昭の古今集注、仮名日本紀などに似てゐることは注目する価値がある。

と言われているが、この「アルファベット」の次序も、同じく a e i o u とアルファベット順に意改したと考えられるのである。

ヴァリニャーノ自身は、日本語や中国語の理解は浅かったとされているが、そのまわりにはよくできる人がいたのであり、ヴァリニャーノが天正使節として派遣した人にはすぐれた日本人もいたのである。^{注1}

されば、この「アルファベット」の成立にも、日本人の大きな協力があつたものと思われる。

ここに、今までほとんど知られなかった「アルファベット」を紹介

介したのであるが、その言語資料としての価値については、さらに考察を加えなければならぬのである。いわゆるキリシタン版の前に、こういう試みのあつたことが、ボスカロ氏の論文により、より明らかになってきたのである。

はじめにふれた書評の問題についても、さらに資料をつみかさね、お答えしたいと思つてゐる。

注1 福島邦道「ロドリゲス日本小文典考」(『キリシタン資料と国語研究』三二六ページ)

注2 森田武「落葉集本篇の組織について」(『国語学』第十三・四輯 昭和二八年一〇月)

注3 竹田鉄仙「五十音図の研究——音図の成立に就いて——」(『駒沢大学学報第一輯』昭和一五年度)

注4 山田孝雄『五十音図の歴史』(一五五、一五八ページ)

注5 福島邦道「ローマ字『いろは』」(『続キリシタン資料と国語研究』)

——実践女子大学教授——
(昭和五十九年十月十五日 受理)